

夕張出身の写真家 松田芳明氏の戦前・戦中・戦後の炭鉱町夕張についての
聞き取り調査（要旨）

NPO 法人 炭鉱の記憶推進事業団 監査役
元夕張市石炭博物館 館長（学芸員） 熊谷 隆文

はじめに

1930年（昭和5年）夕張市生まれ、現在札幌市在住の写真家 松田芳明氏の戦前・戦中・戦後の夕張における炭鉱の様子や人々の暮らしぶりや、写真集「ふるさとヤマ真谷地」（1987年）に掲載する夕張市にあった北炭真谷地炭鉱の坑内写真撮影の際のエピソード等を3回にわたって聞き取り調査を実施しました。その内容につきまして概要ではありますが、下記のとおり報告いたします。

1. 松田氏略歴

松田氏は現在 85 歳。1930年（昭和5年）夕張町字登川炭鉱社宅に生まれ。小学生時代は真谷地にて育つ。後、若菜・鹿ノ谷に移住。

1949年 夕張北高校卒業。祖父の代から親子3代目として北炭夕張鉱に勤務し、1970年に札幌に転出。コマーシャル・フォトグラファーとして活躍。

2004年 夕張市石炭博物館にて写真展「炭鉱に生きた人々」を開催し、写真展終了後大型パネル写真を含む同展パネルを全て夕張市に寄贈し、常設展示として現在も展示中。

2007年 札幌道新ホールにて写真展「炭鉱に生きた人々」を開催。博物館で紹介しきれなかった炭鉱写真を展示紹介。

2015年 病気療養中ではあるが、現在もフリー写真家として活躍

（夕張関係の主な作品）

「ズリ山のある風景」「空から見た夕張」「ふるさとヤマ真谷地」その他多数。

2. 生い立ち

祖父が明治 29 年に福井県から札幌、夕張に移住し、その年父 松田秀吉が生まれる。祖父は大正 3 年 3 月の夕張炭鉱千才坑の炭鉱事故で死亡したことを父秀吉から聞いている。しかし当時の新聞（北海タイムス）の記事では、炭鉱事故死亡者には祖父の名前が無く、お寺の過去帳によって死亡の確認ができたとのこと。

父松田秀吉は祖父の後を継ぎ、大正 5 年 1 月 1 日に夕張炭鉱本砦に職員として勤務することになる。当時の炭鉱の職制として「小頭（こがしら）」63銭の日給辞令が保存されている。その後、父秀吉は昭和 20 年の 4 月に技師・保安係長の職員として 232 円の月給の高給取りであったが、戦後まもなく昭和 20 年の 12 月には北炭社の人員整理

が始まり、どういうわけかその対象となり退社することとなった。松田氏本人は、当時夕張中学の3年生であり大学への進学を希望していたが、父の退社によりその進学を断念せざるを得ない状況となった。今でも、何故父が人員整理の対象となったのか不可解であり進学できなかったことが残念でならないと松田氏は当時を振り返る。

3. 戦時中の夕張

戦時中の夕張についての詳細な記録は数少ない。とくに戦時下の中国人労務者や朝鮮人労務者家族についての様子を知らせる記録は少なく、松田氏の当時の記憶を思い返す話は貴重であった。夕張市史によると戦時下、中国人労務者は、三菱大夕張鉱業所に450名、北炭の真谷地砦に417名がいた。また、朝鮮人労務者についても夕張鉱業所に約7千3百名、平和鉱業所に約千五百名、三菱大夕張鉱業所に約三千三百名が働いていた。松田氏小学校6年当時は、父秀吉が平和鉱業所で保安係長の社員であったが、決して朝鮮人労務者を苛めることは無かったという。終戦当時の朝鮮人労務者の暴動があったときも松田家は感謝されることはあっても暴動の対象となることはなかった。

ただ戦時下に受けた思想教育は今振り返っても恐ろしいものだったと松田氏は振り返る。北炭夕張炭鉱では、いわゆる強制連行・強制労働といわれる時代以前から募集坑夫として朝鮮人労務者が働き、その子弟も日本人と同じ小学校へ通っていた。小学生の松田氏も近所に朝鮮労務者の家族が住み、そこの子供たちと仲良しでいつも遊んでいたが、戦争が始まると学校での教師の態度が変わり、朝鮮人を劣った人間として差別するような思想教育を日本人の子供たちになされたという。松田氏も、次第に子供ながらも一緒に遊んでいた朝鮮人の子供を劣った人間として見るようになってしまい、今でもその子供に謝りたい思いに駆られると話してくれた。

昭和20年7月14日、15日の北海道大空襲下の夕張についても語ってくれた。記録としては夕張での空襲被害は無かったが、夕張中学3年になっていた松田氏の記憶では、7月14日は夕張全域が厚い雲に覆われ、爆音とともに上空にグラマン機が来たのがわかったそうだ。ちょうど、今の夕張日吉地区から千代田地区の上空を飛び千代田の山腹に数発グラマン機からの射撃があったことをその閃光とともに記憶しているという。

4. 北炭夕張鉱事務員からコマーシャル・フォトグラファーへ

終戦後、父秀吉の退社により進学を断念した松田氏は、家族のためにも北炭社へ就職することを希望した。父の退職により炭鉱住宅から出なければならず、住宅に残るためには松田氏が北炭社へ就職する必要がある。社員を目指し北炭社の就職試験を受けるが、社員としてではなく鉱員扱いの事務員として北炭夕張砦で働くこととなった。そこでやらされたのが炭鉱の図面をカメラで接写し現像する仕事であったという。当時夕張炭鉱の事務所ではカメラを扱える人間おらず、松田氏が見よう見真似でカメラ技術を習得していったという。やがて、鉱員扱いの事務員から社員への登用は見込みがなく、また合理化のため

人員整理の動きもあったため退社し、1970年にはコマーシャル・フォトグラファーとして札幌に転出することになる。

札幌では、広告代理店からのコマーシャル・フォトグラファーとしての仕事を中心にしていたが、やがて北海道大学からの依頼で同大学が所蔵する数百枚にわたる開拓使時代からの古写直接写複製の仕事を請けることで、炭鉱の歴史や炭鉱で働く人たちの普通のありのままの姿を伝えたいという衝動に駆られることになる。

5. 写真集「ふるさとヤマ真谷地」出版で、炭鉱の本当の姿を知らせたい

松田氏は今回の聞き取り調査の最中に、何度も語気を強めて繰り返し話していたことがある。『炭鉱で働いてきた人たちは「炭鉱夫」ではないんだ、「炭鉱員」なんだ』『確かに戦前は、坑夫と呼んでいたが、戦後は法律的にも炭鉱員になっている。坑夫という呼び方は一般の労働者より劣った人間と思われて、私は嫌な気がする』また、炭鉱事故などでマスコミが紹介する炭鉱のイメージが、炭鉱事故でいつ死ぬか判らないことから、酔い越しの金は持たず大酒飲みであるかのような世俗的な一面だけを紹介することにも反感を覚えるという。

多数の炭鉱で働く人たちは、命がけで働き汗水を流し、普通に子供たちを育て家庭を大事にしていたんだということを写真集をとおして伝えたかった。その松田氏の思いが込められた写真集「ふるさとヤマ真谷地」は1987年に出版された。地底700mの坑内現場まで防爆型のカメラを背負って松田氏が坑内の炭鉱員の労働現場の姿を撮影した写真が中心となっている。本来ならば、保安上のことや炭鉱会社の労務政策的なことからも外部の人間が坑内現場の写真を撮影することは許可されない。しかし当時は、北炭社で夕張最後の炭鉱となった真谷地炭鉱が閉山間際であったことや、炭鉱長が松田氏の小学校時代の友人であったことが幸いして撮影が許可されたそうだ。親子3代目になる松田氏も坑内労働の経験は無く、真っ暗な縦層になる坑道を鉱員たちに付いて歩くだけでも命掛けであった。しかし、真谷地炭鉱で働く鉱員達は、皆優しく撮影にもとても協力してくれたという。

この写真集が後に、北海道炭鉱塵肺訴訟の裁判資料として扱われるとは松田氏も思わなかったことのようにだ。写真集が出版されてから間もなく、原告弁護団と被告弁護団の事務所から10冊の単位で書籍の注文があったそうだ。

おわりに

1960年代のエネルギー革命により国内炭の地位は急激に低下し、国が打ち出したスクラップ・アンド・ビルド方式の石炭政策の厳しい合理化によって、各炭鉱は、次々と閉山に追い込まれ、夕張においても、真谷地炭鉱が1987年、三菱南大夕張炭鉱が1990年に閉山となり、夕張から全ての炭鉱が姿を消すことになった。そして炭鉱で働いた人達の数も人口の減少と高齢化により僅かとなり、その歴史を伝える機会も少なくなった。

今回の松田氏の聞き取り調査は、松田氏の持病の悪化により、一時中断せざるを得ない

状況となったが、松田氏本人の希望もあり、病状回復次第夕張での巡検等を再会し、貴重な炭鉱の語り部としての聞き取り記録を小冊子としてまとめることの機会を得ていきたい。また、松田氏が所蔵する炭鉱関連写真については、後世のために有効に活用していただければという本人の希望もあるため収蔵保管の方法等について今後話し合い調整していくこととしたい。

以上